

# 背徳の扉

## ― 試読版 ―

*Presented by Project-E (A. S. G.)*

原案 富瀬 さかい ・ 斎藤 和哉

文章 茂州 一字

挿絵 斎藤 和哉

青年向 (18禁・X指定)

※この作品の内容はフィクションです。実在する人物団体などとは一切関係有りません。

※このファイルは、**試読目的でのみご利用頂きます。**

※このファイルは、サークル *Project-E (A. S. G.)* が許諾した場合にしか転載出来ません。)

※この作品の著作権は、サークル *Project-E (A. S. G.)* と、著作者が全て保持しております。

無断で複製・配布・販売する事は法によって禁止されております。

*Copyright © 2003 Project-E (A. S. G.) All Rights Reserved.*

私は、薄暗い地下室で目覚めた…。

ここで目を覚してから三日目だろうか。

昨日、この館の主人に会わされた。一見

紳士的だけれど、鋭く獣の様な目を

した男。私は、一目見ただけで、何か

嫌悪感を感じた。

食事は、時間になると、信じられな

い位、豪華なものが運ばれてくる。あ

の男は、私をどうするつもりなのだろ

う…。私はもう、綺麗な身体のまま、

この館から出られるとは思っていないか

った。

『私…、これからどうなってしまう

の…』

部屋の片隅に有る鏡を覗き込みながら

私は呟いた…。

・

・

・

時計の針は、午後六時を指していた。

食事が運ばれてくる。温かいスープと、

美味しそうなソテー…。他にも、滅多

に口にした事がない料理が並ぶ。

食事を運んできた男が私に告げる。

『食事の後、ご主人様がお顔を見たい

と申されております。後でお迎えに参

ります』

今日もあの男に会わなければならな

い……。私は、溜息<sup>ためいき</sup>をつきながら、料理に手を付け始めた。

・ ・ ・

今、私は、あの男の部屋にいる。その冷たい目で、私の身体を舐<sup>な</sup>める様に見ている……。「怖い……」

『服を脱ぎなさい……。そう、全てを』

『えっ？』

男が信じられない様な事を口にする。

私だって、乙女<sup>おとめ</sup>の端<sup>はし</sup>くれ。恋人でもな

い男の前で脱ぐなんて……。私が、目をそらしながらもじもじしていると、男が近付いてきた。「怖い……」

『ふん……。素直<sup>すなお</sup>でない所も私好みだ。さて、無理矢理<sup>むりや</sup>になるが脱いで貰<sup>もら</sup>おうか』

……「私好み？」 私は、その言葉を聞いて背筋に冷たいものを感じた。「私は、この男に何らかの好意を持たれている……。」「そんな事を考えていると、男の大きな手は私のワンピースのボタンを外し始めた。

『い……。嫌あ……。』

『くくく……。』

男は楽しそうに私の服を一枚ずつは

いでいく……。」「は……。恥ずかしい……。」「私が身を固くしていると、男の微かな笑<sup>かす</sup>い声が聞えてくる。「怖い……」

気が付くと、ブラジャーも外され、ショーツを脱がされようとしていた。「嫌っ！」私は、太股に力を入れて抵抗する。しかし、悲しい程簡単に、ショーツを脱がされてしまう。私は、男に、靴下だけの姿で、後ろから軽く抱かれていた。

・ ・ ・



無理矢理服をはがれ、今私は、ほぼ全裸<sup>ぜんら</sup>で、男の前に立たされている。私は右腕で胸、左手でアソコを隠す……。消えてしまいたい程に恥ずかしい……。

そのまま暫<sup>しばら</sup>く時が過ぎた。そう言えば、妙に肌寒<sup>はださむ</sup>い……。今は確か夏……。と言う事は、この部屋の空調の温度設定

が低めになっているのだろうか。

そして、私はこの男の真意しんいを知る事になる。そう・・・、トイレに行きたくなってしまったのだ。

『あ・・・あの・・・』

『ん？何だね、お嬢さん？』

男は、冷たい目のまま静かに私に語り掛ける。

口調だけは、紳士しんしてき的だ。ただ、私は、この男を見ると、何か恐ろしいものを感じる。この恐れは、一体何なのだろう。

『ト・・・トイレに行かせて下さい・・・』

『ふふふ・・・。私がそれを許すと思うかな？』

相変らず、口調は紳士しんしてき的だ。しかし、男の口元は厭いやらしく歪ゆがんでいる。「許可してもらえないのね・・・」私は、絶望ぜつぼう感に襲おそわれ始めていた。「許可してもらえないと言う事は、私は一体どうすれば・・・」

私が、尿意にょういに耐たえていると、男は部屋の奥に消えてしまった。「??」しかし、私は、見逃みりむさなかった、振向ふりむく瞬間に、よりいっそう歪ゆがんだ、男の口元を：。「・・・私・・・どうしてこ

んな事に・・・」

・  
・  
・

そして、男が戻ってきた時に、私は決定的な「絶望感<sup>ぜつぼうかん</sup>」を味合わされた。

男は何と「金だらいい」を持って戻って来たのだ。

『さあ、一部始終を見てやるから、これにするんだな、くくく』

『お、鬼！・・・ひどいわ・・・、人でなしっ！』

『何とでも言うがいい、お前には選択権は無い』

男が冷たい目で私を眺めながら答える

る。男の放つ威圧感<sup>いあつかん</sup>が私に悟<sup>さと</sup>らせる。

反抗出来ないという「現実」を……。「でも、でも・・・そんな・・・この男の目の前で・・・」私は、羞恥心と生理現象の狭間<sup>はざま</sup>で葛藤<sup>かつとう</sup>していた。

「駄目・・・人間としての尊厳<sup>そんげん</sup>が・・・」そう思う……。しかし、ドアには鍵<sup>かぎ</sup>がかけられている……。仮に、掛けていなかったとしても、逃げられるとは思えない……。

・  
・  
・

私は、冷汗を流しつつ耐<sup>た</sup>えたが、到頭<sup>とうとう</sup>我慢<sup>がまん</sup>の限界に達してしまった。

# 続きは、正規版でお楽しみ下さい。

## ― 奥付 ―

書名 背徳の扉 ― 試読版 ―  
著者 原案 富瀬 さかい  
斎藤 和哉

文章 茂州 一字  
発行日 2003 年九月十一日  
編集 *Project-B (A.S.G.)*  
編集人 夏鬱 神

発行者 斎藤 和哉

発行所 *A.S.G.*  
( <http://slabo.lib.net/asg/> )

*Copyright © 2003 Project-B (A.S.G.) All Rights Reserved.*